

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2017/9/8	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	榊原香鈴美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
韓国・济州島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
济州島の野生ミナミハンドウイルカ研究の補助
3. 派遣期 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 9 月 4 日～9 月 6 日 (3 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士／〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Dr. Byung-Yup Kim (Professor of Jeju National University) Ms. Soojin Jang (PhD student of Ewha Womans University) Ms. Kim Mi yeon(PhD student of WRC)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>本出張では、D1の Kim Mi yeon さんがおこなう博士研究課題のデータ取得へのアドバイス・補助、ならびに現地研究者の Jeju 大学の Byung-yeob Kim 教授、イファ大学の Soojin Jang さんとミナミハンドウイルカの情報共有・共同研究に向けての意見交換をおこなうことを目的とし、指導教官の幸島司郎先生とともに韓国济州島を訪問した。</p> <p>9/4(月)、関西空港からの直行便で济州島に向かい、到着後東門市場を視察。济州島は漁業が盛んで、定置網漁、回し網漁、釣り、養殖業とさまざまな手法で魚を獲得している。市場では、旬のコノシロやイカをはじめ、ヒラメ、タチウオ、スズメダイ、そして海女産のアワビ、ツブ貝などが並んでいた。济州島のミナミハンドウイルカは特にヒラメを好んで食べている(Kim Mi Yeon 私信) そうだが、他の小型鯨類がエサにしているコノシロやイカもエサになっている可能性を感じた。9/5(火)は、8:00 にホテルを出発し、島の沿岸道路を車で西に走りながら鯨類を探した。市街地のホテルから沿岸までは1時間ほどで、9:02 より探鯨を開始。ハップチュビーチ、遮島前のチャグネ浦口などいくつかのポイントで下車しながら(写真1)、10:33 に図の青丸位置でイルカの群れを発見した。</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真1. 陸からの探鯨のようす</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>地図. 济州島 (青丸：9/5 イルカ発見場所)</p> </div> </div>
<p>ここは陸地に養殖工場がたくさん並び排水口が海につながっており、場内の水槽の清掃時に養殖されている魚やそれらの魚のエサとなる小魚・プランクトンなどが定期的には排出される地点である。今回の観察時には</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

確認できなかったが、魚を口にくわえているようすも何度か目撃されており、これらの養殖場の排水に紛れた魚を目的にこの海域が昼間の採餌場となっている可能性も示唆された。発見頭数は 40 頭以上 (Kim Mi Yeon によると 80 頭近く)。肉眼でも個体のようすを観察することが可能で、岸からわずか 100~400m ほどのところを行ったり来たりするようすがみられた。双眼鏡や一眼レフ 300mm レンズで確認すると背びれのカケがはっきりと見え、背びれの前が大きく欠けている個体や V 字 U 字に切り込みの入った個体など多くの特徴ある個体を識別することができた。さらに、混獲個体のリリースプロジェクトで済州島海域に放たれたイルカも確認した。背びれには冷凍印の”1”という文字が見え、チェドリというイルカであることがわかった。すでにリリースプロジェクトで6頭のイルカが野生復帰しているが、ほぼすべてのイルカが元個体群の群れに参入しており、そのうちの2頭は出産・育児をしている最中だという。昼食をとったのち、14:11 に同海域でイルカの群れを再発見。ドローンを飛ばしたところ、双眼鏡や一眼レフでは確認できなかった産まれて数日と思われる子イルカがいることを確認した。この子イルカは母と思われる個体の下から支えられるように呼吸をしており、その白い腹が上空からもしっかりと撮影できた。母イルカはリリースした個体でまだ出産が確認されていないイルカだと思われるが、ドローンの垂直撮影だと背びれの自然標識での個体識別は困難であるため、今後子イルカが成長して一眼レフでの記録をしっかりとおこなうことで判別されるだろう。5日の夜は、Prof. Kim 氏、またイファ大学から来ていた Kim Mi Yeon の元指導教員である Prof. Jang 氏とともに夕飯をとりながら、済州島でのイルカ研究と御蔵島のイルカのようすについて情報交換をおこなった。採餌時間帯や空中行動の頻度など、大まかな観察でも大きな違いが見られるため、今後地域個体群ごとに比較していくことで新たな知見が得られることが期待できる。

9/6 (水) は、東回りで 5 日と同様の方法で探鯨をおこなった。東側はリゾート開発が進んでおり、多くの観光客が海でのアクティビティを楽しんでいるほか、短期滞在に限らず、移住してくる人も近年増加しているようで、多くのアパートや建物があった。2年前に済州島を訪問したよりも、その数は明らかに増えており、同様に洋上の風量発電機も少なくとも 10 機以上増えていることに気づいた。東側は西側に比べて浅瀬が遠くまで続いており、干潮時には岩礁による天然生簀ができあがる海域も多々あった。その中のひとつは、昨年オスのイルカが3ヶ月ほど1頭で滞在していた場所で、ここにもまた、養殖場の排水が流れ込むところがあった (写真 2)。



写真 2. 東側の養殖場からの排水口



写真 3. イルカのイラストが入ったウォッチング船

また、今回の観察中いくつかの漁船とドルフィンウォッチング船、海女と人の視認距離まで近づいているようすが見られた。ドルフィンウォッチング船は 2 年前の視察では 1 度も目撃しなかった (あることは聞いていた) が、今回の 1 日半の観察中 3 回も目撃した (写真 3)。洋上風力発電の増加、素潜り・漁船・定置網含む通年の漁、養殖場からの排水による人工的な一過性の魚類層の変化、さらに止まらないリゾート化とドルフィンウォッチングの拡大など、人間活動の影響を非常に受けやすい環境であることは間違いない。透明度が高く、温かい済州島の海では今後水中ドルフィンウォッチングの試みがされることも容易に想像がで

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

きる。これらの負の影響を最小限におさえ、濟州島のミナミハンドウイルカの個体群を持続させるためにも、Kim Mi Yeon さんを筆頭に濟州島のイルカの基礎生態研究が急がれると、今回の視察を通じて改めて感じた。

6. その他 (特記事項など)

Thanks a lot, Ms. Mi Yeon Kim and Ms. Soojin Jang. Also, I appreciate to Prof. Byung-Yup Kim. I'm always thankful for the help of PWS office.